

フィリピンとの掛け橋

第14号 日本聖公会九州教区宣教局フィリピン協働委員会発行

2008年11月22日

シャーウィン司祭滞在特集



10月12日(日)宮崎聖三一教会で

シャーウィン司祭、20日間滞在

9月25日(木)から、10月14日(火)、フィリピン中央教区のシャーウィン・リングリング司祭が日本に滞在し、福岡に到着後、沖縄教区、東京教区を訪問後、北九州、長崎、厳原、宮崎、福岡を訪れ、各地で交流した。

シャーウィン司祭の日程

9月25日(木)午後6時45分、福岡空港に到着。ホテルに宿泊。

26日(金)福岡聖パウロ教会、ベテル教会を訪問後、常置委員会による歓迎夕食会。

27日(土)福岡空港から、沖縄へ。三原聖ペテロ聖パウロ教会到着。首里聖アンデレ教会、首里城、国際通り、公設市場を回って三原教会へ帰る。

28日(日)三原で、日曜学校、聖餐式説教、教会で自己紹介など交わり、夕方ビーチパーベキュー。

29日(月)小祿聖マタイ教会、琉球ガラス工場でコップ作り、おきなわワールド(エイサー、鍾乳洞見学)、ひめゆり資料館

30日(火)北谷諸魂教会、美ら海水族館、愛楽園祈りの家教会、屋我地聖ルカ教会、主教主催晩餐会(主教法妻・上原司祭一家、岩佐聖職候補生が参加)

10月1日(水)沖縄から東京へ。池袋聖公会に到着。昼食後、駅周辺を散策。

2日(木)立教大学新座キャンパス訪問。

3日(金)東京教区事務所訪問。植田主教と懇談後、カパティランの働きを見学。東京タワーに昇る。

4日(土)町田真光教会で「でんとも会」の集会に参加。

5日(日)町田真光教会での聖餐式で説教。昼食後、沿線のソプラノ歌手のミニコンサートも開かれる。

6日(月)新横浜から小倉へ新幹線で移動。小倉インマヌエル教会で夕食会。

7日(火)八幡の教会や小倉城等見学後、バスで長崎へ。

8日(水)長崎の原爆死没者追悼平和祈念館、原爆資料館、爆心地公園など見学後、飛行機で対馬へ。

9日(木)厳原聖ヨハネ教会で、対馬に在住のフィリピンの人々と集会。

10日(金)福岡へ飛行機で移動後、高速バスで宮崎に移動。

11日(土)午前中鶴戸神宮を見学。夜、教会で交流。

12日(日)宮崎聖三一教会で礼拝後、福岡へ移動。宿泊するホテルで有志の夕食会。

13日(月)福岡市内でショッピング。昼食は福岡聖パウロ教会の人々と。夜、フィリピン協働委員会と反省会と夕食会。

14日(火)福岡空港発午前9時25分のフィリピン航空機で帰国。

目次

シャーウィン司祭、20日間滞在。日程。	1
シャーウィン司祭の説教 9月28日(沖縄)	2
シャーウィン司祭の説教 10月 5日(東京)	3
シャーウィン司祭の説教 10月12日(宮崎)	5
シャーウィン司祭をお迎えして ベイカー博子	7
シャーウィン司祭のスナップ写真	8
来年のキャンプに向けて	8
編集後記	8

シャーウィン司祭の説教

2008年9月28日 沖縄

沖縄教区三原聖ペテロ聖パウロ教会

聖霊降臨後第20主日

フィリピの信徒への手紙2:1~13

主にある兄弟姉妹の皆さん、おはようございます。

今日この礼拝に皆さんと共に参加できることをたいへん光栄に思っています。特にこうして礼拝説教を担当できることは大きな喜びです。非常に貴重な経験をありがとうございます。

はじめにフィリピンの聖公会を代表して、また現在私が司祭として仕えていますアドベント・エписコパル教会の一員として、父なる神と主イエス・キリストの恵みと平和が常に皆さんと共にあるよう祈ります。

「イエスキリストが教えられた如く、私たちもそのように行いましょう。」(フィリピ2:5)

これはパウロが手紙を通してフィリピの信徒へ申し述べたことです。この手紙は、パウロが愛し、たいそう気にかけて教会や信徒に対する親密さや感情に溢れたものでした。パウロは、彼の宣教でもっとフィリピの教会を建てたので、教会に対して溢れるほどの愛情を持っていたのは当然のことかもしれません。復員に根ざしたフィリピの信徒との関係は、最初の日から、パウロが投獄された暇で変わらずに続きました。

このことは、現在を生きる私たちに「十字架のもつ意義」の問題をつきつけています。

獄中にいたパウロは、小規模に分かれたフィリピの教会や信徒たちに関心を向けていました。彼の手紙では、自己中心的な態度、高慢、他者よりも自分を重んずる態度などが取り上げられました。これらの態度は調和を妨げ、フィリピの信徒たちの結束を乱すものでした。

パウロは、これらの態度は教会内の亀裂をもたらす害であることを指摘し、イエス・キリストが示された例をもって、調和の取れた分かち合いについて述べています。

このことは、フィリピの信徒への手紙2章1~11で具体的にイエス・キリストによって示されているとおり、父なる神に自らを捧げるという形でのイエス・キリストに倣うということにつながるものです。キリストは神の身分でありながら、人間の姿で現れ、へりくだって、十字架の死にいたるまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げられました。

たしかに、パウロはただ説教をただけでなく、私たちが追従しなければならぬ行動やモラルの例を揚げています。また、彼は信徒たちにどのようにしたらイエス・キリストに倣う者になれるのかを指摘しています。フィリピの人々が、キリストとともに生きるために、他者への思いやりと献身を通じた謙虚な人生が鍵となることを述べています。

パウロがフィリピの信徒たちに与えたひとつの重要な観察に、父なる神は、私たちが創造されて父であるとともに、またわたしたちを家族として結ばれたものであることを述べています。この意味で、フィリピの人々に影響を与える事柄は、そのまま父なる神に影響が及んでいくこと、そのためにキリスト・イエスが、神と私たち人間の双方に存在し守っていると述べています。

日本とフィリピンの聖公会は、様々な形で関係を持ち、福音を述べ伝えるため共に働いてきました。私たちは、同じ理由と目的をもってやってきました。年を追うごとにますます協働関係が強められることを祈ります。宣教、祈り、さまざまなプログラムによる分かち合いを行うとき、わたしたちは、イエス・キリストが示されているとおり、行い、身につけるようにしなければなりません。

一方で、私たちはパウロに生じたいくつかの問題が、どの時代でも教会が直面することであることを認識せねばなりません。現代を生きる私たちも、自分たちの小さいサークルの中で生きているという意味では、当時のフィリピの人々となんら変わりはないのです。私は時として、教会が従順や謙遜を忘れて、リーダーとメンバーの間でふたつに分裂してしまうことを知っています。これまでのキリスト教の歴史を辿ってみると、これらの事実に関する証言がいくつも見られます。

よって、イエス・キリストの態度を模範にしようというパウロの呼びかけはどの時代においても有効に働くものだと思います。そして、この呼びかけは、人間同士、教会同士、国同士の間でも同様に重要となるのです。

クリスチャンを標榜する者として、私たちが常に心に留めておくべきことは、パウロの呼びかけを真剣に受け止めることが、調和と結束の増加につながるということです。

「あなたの行いは、イエス・キリストに倣うべきものである」といったこの言葉は、今日の教会の貴重な指針となるので、単なるパウロの真摯な呼びかけ以上の意味を持っています。私たちは、それぞれの日常生活において、それぞれの方法において主イエス・キリストの教えてくれたように祈り、宣教、み業に励むことができますよう皆で祈りましょう。

最後に、皆さんと短い秘話を分かち合いたいと思います。

神がある男に言いました。「お前の仕事はよりよい世界を作ることだ」と。

「どのようにしたらいいのですか？」男は尋ねました。「この世界はとても大きく、広漠としていて、私にできることは何もありません。」

しかし、すべての知恵の源である神は彼の質問に答えて言われました。「単にお前自身をよりよくすれば良いだけなのだ」

このたとえ話のように、イエス・キリストが示されたように、よりよい世界を作るよう私たちも参加しましょう。私たちは、今この小さい話に基づく神からの呼びかけに答えて、「よりよい自分自身を建て上げます！」アーメン



9月28日(日)夕方、三原教会の人々とバーベキュー



9月29日(月)、上原司祭(左)とともに

2008年10月5日 東京

東京教区町田真光教会

聖霊降臨後第21主日

テキスト: フィリピの信徒への手紙第3章14~21節

フィリピン聖公会を代表して、みなさんにご挨拶を伝えます。個人的には、私は神に、また私の教区と九州教区とのパートナーシップに大変感謝しています。このパートナーシップは、私の生活において多くの目標を達成することを可能にしてくれました。その1つが真光教会を訪問することで、このことに個人として、有難うございますといたいのです。

私は、みなさんがずっと前に、フィリピンの聖アンデレ神学校の学生にして下さった資金援助の恩恵を、1988年から1992年の卒業まで受けていた者です。よき主なる神の多くの祝福が真光教会に注がれ、この寛容なよい行いが励ましとなって、すべてのキリスト者を自認する者が、神の栄光のために同様の行いをするようにしていただきますように。

パウロはフィリピの信徒への手紙の中で、目標を達成することについて語っています。そして彼はその目標を達成しようとただ熱望するだけでなく、最終的にそれに所有されることを語っています。かれはフィリピの信徒に、共にいづく目標に対し、彼自身と同じ熱心さと特質をもって行なうことを勧めています。この熱心さと特質は、パウロの人間としての能力に基づくのではなく、パウロがコリントの信徒への手紙でも呼びかけたように、主イエス・キリストの模範に基づくべきものなのです。コリントの信徒への手紙 第11章1節

に、「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい」とあるように。

パウロが言っているこの熱望と並んで、彼は同じように注目すべきもう1つの重要な問題について語っています。

まず第1に、パウロが共通の心を持って、と呼びかけたことに注目しましょう。

フィリピでパウロがキリスト者として改宗させた人びとのなかに、自己の信仰の成熟度の高さを誇るような思想を持つ者が出てきました。このような思想が、ある一部の改宗者たちの行為に影響を与え、教会内で誤解を作り出しました。それは統一を促進するのではなく、むしろ調和を乱しました。このことがパウロに、信仰に関して共通の心を持つ必要を彼らにうながすことになりました。そしてパウロは彼らを自分に注目させるようにして、躊躇せず彼らが彼に見習うことをうながしました。彼の情熱と態度を見習うということは、キリストへの信仰に向かって真の信仰者が、みずからなすべきであると考えられることを行なうことでありました。私たちキリスト者も、キリストへの信仰において、共通の考えと理解をもつことが重要なのであります。

私たちが信ずることについて私たちの間で互いに一致できないならば、他の人びとからの尊敬を決して得ることができないでありましょう。パウロがフィリピの信徒に対して共通の心を持つように、と諭したように、彼は私たちにも同じことを諭しています。もちろん違いというものには常にありますが、パウロはそれにあまり煩わされまいよう忠告しています。そうする代わりに、彼はそのようなことは神が扱ってくださるのだと明言しています。すなわち、パウロは私たちキリスト者に、私たちは信仰を守り、共通の心を持つことによってそれを達成する責任があることを、語ろうとしたのです。そして神が、その他のことは扱ってくださるのだと信ずると言おうとしたのです。

第2に、パウロが警告した「いつわりの教え」について注目しましょう。フィリピの信徒への手紙第3章18節に、「キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです」と書かれています。これはパウロが、自覚的キリスト者でも、その彼らの信仰と教えが、キリストの人間の救いのためになした犠牲の行為を否定してしまっていることがあると嘆いた言葉なのです。パウロは彼らを、この世にとらわれた心を持った人びとといい、彼らは自分自身を喜ばせることのみを

求めていると述べています。彼らは信仰について二重規範(ダブルスタンダード)を持って生きているのです。彼らはキリストに従う者であるといいながら、それとは反対の生活を送っているのです。

イエスは、彼らに下される審判がどのようなものか示しています。イエスは次のように言われました。「かの日には、大勢の者がわたしに『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働くものども、わたしから離れ去れ』」。(マタイによる福音書第7章22~23節)

それなので、私たちは自分自身に気をつけ、自分を見張っていきましょう。私たちの世代は、隅々に至るまで多くの誘惑に満ちた教えや知識と向き合っているのです。その教えと知識は、この世のもののみを頼り、精神的なもの神ご自身を下におくのです。パウロは私たちに、自分自身を守り、パウロのいう「彼らの目的は破壊である」というものを避けるよう警告しています。また救い主イエス・キリストご自身の口から発せられたような、恥と非難の行為を避けなければなりません。

第3に、私たちは、パウロが私たちの本国(citizenship)について思い起こさせたことに注目しましょう。パウロは私たちの本国は天にあるともしました。(フィリピの信徒への手紙第3章20節)天を本国であると考えられることは何とすばらしいことでしょうか。私たちの名前が天にある「命の書」に書かれているのです。ちょうど私たちが住んでいる国において、私たちの名前が記されているように。私たちは本国での法律に支配されています。天を本国とする人として、天の性質に合致するような行動や行為にふさわしい法律に支配されているのです。

マタイは、その福音書で、「至福(Beatitude)」(マタイによる福音書第5章3~12節)と呼ばれる部分において、天を本国とする人とはどういう人が、を説明しています。

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされ

る。
憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。
心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。
喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。
あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。

そのため、「私たちの生きる道」が、天を本国とする者としての生きた証拠となるよう、自分自身を教育しなさい。

私のメッセージを終えるのにあたり、次のことを記します。
パウロは、私たちに、彼に従い、神が私たちに示した目標に到達する競争に加わるよう招いています。その美しく、魅力的な目標は、比較すべくもない興奮と喜びをもたらします。
パウロは、彼自身、これが真実であることを見出したのです。それは私たちにも真実であることは確かです。私たちが今述べた競争に加わる時、私たちは「共通の心」を持つこと、「正しい教え」を保つこと、「天の本国」にしっかりとつながり、勝利の褒賞を得ること、が重要であると認識しましょう。

(翻訳:吉田昌夫、聖書は新共同訳による)



10月5日(日)町田真光教会で



10月4日 町田真光教会で牧師の鈴木司祭(左)と

2008年10月12日 宮崎

九州教区宮崎聖三一教会
聖霊降臨後第22主日

聖書 フィリピの信徒への手紙第4章4節～13節

本日は皆様に、フィリピン中央教区よりの心からの喜びに溢れるご挨拶を申し上げます。

過去5～6年間に九州教区と私の属するフィリピン中央教区との協働関係を通して、フィリピン中央教区から何人も聖職者たちが日本に招かれ、各教会や美しい地を訪ねて、交流を続けてまいりました。これまでに来日しました司祭たちに代わりまして、改めてお礼を申し上げます。

さて本日の日課は、フィリピの信徒への手紙4章4節から13節ですが、今日の礼拝に輝くような喜びと穏やかな幸福感をもたらしてくれる箇所だと信じています。

何と喜びと暖かさに満ち溢れた手紙でしょう。ところが皮肉なことに、この手紙はその人生において長い間、不条理な艱難辛苦に耐えてきた、ある一人のひとによって書かれたものなのです。

彼は同胞から迫害を受け、追放され、乗っていた船が嵐で難破して、捕らえられ、牢獄につながれて裁判を待っている状況にある人です。それにもかかわらず心の中は、これほどの喜びで溢れていたのは、何故でしょうか。

本日、ここにお集まりの皆様にも人生には、いろいろと苦

労が尽きないことと思います。

フィリピンでも最近のトップニュースといえば原油高や、物価高など、聞くたびに血圧は上がるわ、気分は落ち込むわという話ばかりです。

こういうことも原因となって、多くのフィリピン人が海外へ出稼ぎに行くのは、大切な家族に少しでも明るい希望ある未来を与えたいと思っているからです。日本もまた、そんな彼らの、いわゆる「夢をかなえられる国」の一つとして沢山のフィリピン人が働きに来ています。

日本人にも苦勞の絶えない人は多いことでしょう。そして、環境や事情が悪化してくると、その中で喜びを感じることはほとんどなくなってくるものです。

そこで、これらをふまえた上で本日のパウロの言葉を聞いていただきたいのです。

その1.として先ず正しいお祈りの仕方を学ぶように勧められています。「祈りをささげる時は、いついかなる時にも先ず神に感謝をすること。そうすれば私たちの心の中に平安と穏やかさが満たされ、真の主の平和を体験することができる。」と。

皆様は、いつもお祈りをささげておられますか。クリスチャンならばそれが当たり前だと思われがちですよ。パウロこそは、当に祈りの人でした。

エフェソの信徒への手紙6章18節で、「どのような時にも、常に祈りなさい。」と言っているとおりです。それでも全ての祈りが聞き届けられるとは限らない。神様の答え方には3とおりあるとか。

「No」と言われる時は、あなたにとって本当に必要ではないから。「Yes」ならば必要であり、「待て」であれば、今は未だその時ではない、のだそうですが……。

パウロが感じている喜びや心の平安というものは、神様の答えの中ではなく、祈りに対する私たちの態度の中に見出せるもの。神の御旨にかなった祈り方をすること。

第2の勧めは、前向きな考えを持って進むこと。

一般にはものごとに成功する人というのは、目標を定め、それに向かって、ひたすら前進する人が多い。

パウロは考え方や発想の中にある力の強さというものを知っていた。人生はその人の考え方次第で将来が強く左右されるもの。ところがどうしても、辛いことや暗いことに気持ちが向いてしまう。そういう傾向がますます次の心配事や不幸を招く誘因になる、と専門家は言っている。

逆に「笑いは一番の良薬」と言われるように笑う事で体の中の負の気を一掃することもできる。

神様の素晴らしい寛大さを認め、全く真実なこと、気高いこと、正しいことを常に心に留めて、前に進むこと、とパウロは説く。

あなたはどのアドバイスを参考にしますか。
皆様の賢明なる判断にゆだねましょう。

第3に信仰の実践の勧め

パウロがキリストに人生に倣ったようにフィリピの人々もパウロから学んだことを倣い実行してほしいと4章9節で伝えている。

実行の伴わない信仰では何にもならないと。

それに関する逸話を一つ。

ある綱渡りが、10メートルの長さを素足で渡る。成功すると見物人からは拍手喝采！次にバイクに乗って渡ると興奮は最高潮に達し、「もっとやれ！」の大合唱。そこで見物人に向かって、「では、どなたか私の後に乗って、一緒に渡ってくれないか」と言ったとたんに拍手がピタリと止み、し～んとなって手を挙げる人は一人もいなかった。

という話ですが、如何ですか？

信じている事でも実行に移すとなると二の足を踏んでしまう。言葉だけの信仰と行動を伴う信仰との大いなる違いはパウロのように実践してみて初めてわかることである。

最後に、「自分のおかれた境遇に満足して生きること。」パウロはフィリピの信徒への手紙の中で彼らを讃え感謝している。獄中の彼に、さまざまな差し入れや励ましをしてくれたことに対して、お礼を言いたかったのもこの手紙を書いた理由の一つ。

同時に、一方では自分は豊かな時も貧しい時もその時々境遇の中で満足して生きていけるすべを身に付けていると明言している。

人間とは飽くなき欲望の塊であり、アダムとエバがエデンの園で神にそむいて犯した罪から始まった。園の中で何を食べても良いが、善悪の判断を知ることができる実だけは禁じられていた。しかし、誘惑に負け、その木の実を食べてしまったからだ。同じ話の中で、神は1週間のうち6日を人間に与え、あとの1日をじぶんのために残したが、人間は、その残りの1日も自分たちのものとしたとあります。こうして限りない欲望を持つようになった人間には、ここで満足しておこうということがどうしてもできなくなった。

パウロはそれほど難しいことを習い覚えた12～13節の中で次のように明言している。

「私は、いかなる場合にも対処できる秘訣を授かっており、私を強めてくださる方のおかげで私には全てが可能です。」

これを聞けば苦痛そのものと思われる獄中生活の中でも、なぜパウロが喜びに溢れていたのかということがわかる。

兄弟姉妹の皆様！

喜びに溢れた人生を送りたいと望んでおられますか。

それならパウロが勧めてくれる一つ一つの言葉を何度も読んで、じっくり味わい、考えてみることです。

最後に、神がその恵みによって、私たちが正しい祈りの仕方、前向きな考え方、信仰の実践法、満足する人生の送り方の道に導いてくださいますようにお祈りをささげます。



10月12日(日) 宮崎聖三一教会で礼拝奉仕

シャーウィン司祭をお迎えして

宮崎聖三一教会 エリザベツ・ベイカー博子



(10月11日・土 午前 鵜戸神宮を見学。左がベイカー姉)

人懐っこい笑顔と、何でも体験してやろうという積極さで、どこでも大歓迎され、交流を深められて、日比協働の絆を更に強められたシャーウィン司祭。沖縄では「ウチナンチューそっくり！」と、即受け入れられ、東京では、お上りさんコースの東京タワーと浅草も訪れ、九州でも各地で交流されて日本の多様性に驚かれたそう。

宮崎は最後だったので、休養を目的とし、食事も教会ではカレー。我が家でも普段どおりのものをお出した。分刻みのハードスケジュールや食や物に溢れた目まぐるしい現代日本にお疲れ気味かもと心配していたが、一言の文句もなく、常にニコニコと気さくで暖かい人柄が伝わってきた。交流会ではタガログ語の「キリスト者の責任」を朗朗と歌われ、やんやの喝采。朝は5時起き2時間散歩。帰ってきた時には「木花台は大体把握しました。」と言われた。なるほど、これこそ開拓伝道師の資質かと納得。

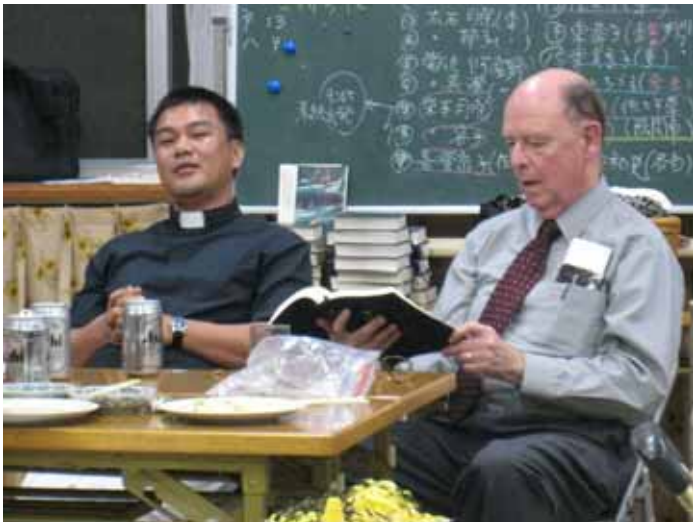
5日間を共に過ごして、先生こそ宮崎で説教された「どんな境遇にあっても満足し、前向きに信仰を実践しながら祈り進む」というパウロの勧めを自然体で実行されている方だと感じた。先生との大切な出会いを主に感謝すると共に、今回のプロジェクトのためお働き下さった、全ての方々にお礼を申し上げます。

いまだにフィリピンモードの私には来年のパラワン島ワークが楽しみだ。皆さ～ん。一緒にまいりましょう！素晴らしい体験ができること請け合いますよ。

シャーウィン司祭のスナップ写真



10月6日(月)北九州の人々と交流(於・小倉)



10月6日(月)コフリン司祭(右)とともに



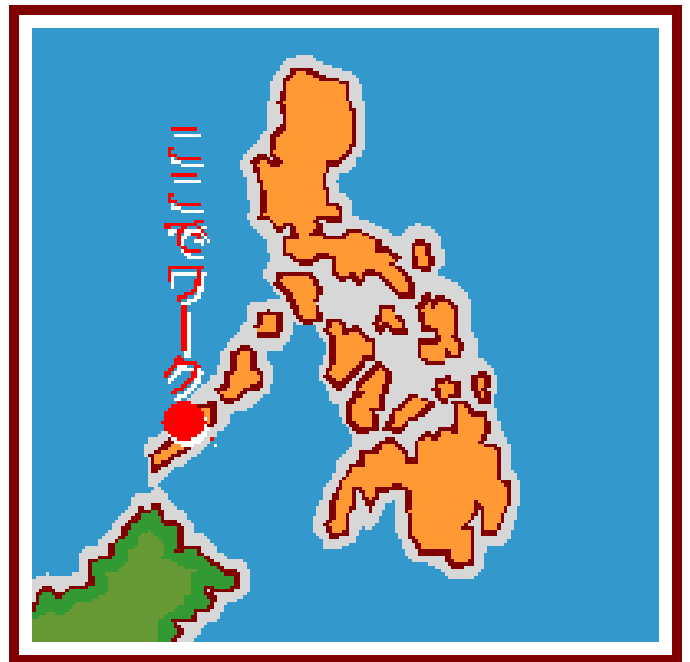
10月11日(土)宮崎のTシャツに沖縄と東京を書き込んでもらい、日本滞在の説明に使うよう贈られる。

来年のキャンプに向けて

2004年から5回続けてきました、フィリピンでのワークキャンプは、来年は3月3日(火)から3月13日(金)という日程がきまりました。場所も、今年と同じ、マニラから飛行機で1時間余りのパラワン島です。

マラリヤの心配があり、今年は日本の病院で薬を購入しましたが、現地で簡単に購入できることがわかり、心配はいらないだろうと思います。

今年参加した沖縄教区など、他教区にも呼びかけています。ワークキャンプの詳細は、12月始めに、各教会にお知らせできると思います。



編集後記

シャーウィン司祭は、2004年、第1回のワークキャンプで、受け入れをしてくださったミンドロ島の牧師、牛島司祭、山本尚生兄、寶嶋(旧姓・沖本)恭子姉は、4年半ぶりの再会。そして、今年の第5回ワークキャンプのメンバーが、帰国する前日訪問した、タガイタイの聖バルナバ教会で、ちょうど伝道区会が開かれており、そこに出席しておられたので、今年のキャンパーには、半年ぶりの再会になりました。

現在40歳。これからも、フィリピン中央教区との協働関係が続くなら、何度もお世話になることでしょう。

10月13日、シャーウィン司祭に、「何かプレゼントしたいのだが、」と言うと、電池のいらぬラジオ付懐中電灯を希望。防災用の器具は、常時キャンプ地では便利だったので、それを紹介したら、喜んで、何台か持って帰られた。